

「招かれているのに・」

ルカによる福音書 14 章

- 15 食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、
「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。
- 16 そこで、イエスは言われた。
「ある人が盛大な宴会を催そうとして、大勢の人を招き、
17 宴会の時刻になったので、僕を送り、招いておいた人々に、
『もう用意ができましたから、おいでください』と言わせた。
18 すると皆、次々に断った。最初の人、『畑を買ったので、
見に行かねばなりません。どうか、失礼させてください』と言った。
19 ほかの人は、『牛を二頭ずつ五組買ったので、それを調べに行くところです。
どうか、失礼させてください』と言った。
20 また別の人は、『妻を迎えたばかりなので、行くことができません』と言った。 21
僕は帰って、このことを主人に報告した。すると、家の主人は怒って、
僕に言った。『急いで町の広場や路地へ出て行き、貧しい人、体の不自由な人、目の
見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』
- 22 やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしました。まだ席があります』
と言うと、
23 主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家を
いっぱいにしてくれ。 24 言っておくが、あの招かれた人たちの中で、わたしの食事を
味わう者は一人もいない。』

この大宴会の話はマタイによる福音書 22 章にも書かれていますが、後半は少し違った書かれ方をしています。

ルカの福音書の特徴的なところを見ていきましょう。

1) 招かれていると自負している人の知らぬ間の慢心

15 食事を共にしていた客の一人は、これを聞いてイエスに、

「神の国で食事をする人は、なんと幸いなことでしょう」と言った。

このように語った人、本人がもしかしたら、宴会への招きを断っている人かもしれないということをお考えるとちょっと真剣にならざるを得ません。

2)宴会への招待とそれに対する欠席の言い訳

落語の中に「素人浄瑠璃」という面白い話があります。素人の浄瑠璃語りの大家さんが人に浄瑠璃を聞かせたくて宴席を設けるけれど、断られるという話。

もちろん聖書の話はそれとは全く別物ですが、この宴会は前もって準備され、予告され、予約もなされていたはずで

しかし、ここに出てくる人々は極めて日常的なこと、それほど緊急を要することではないのに、それらを理由にして、宴会を断っています。

その宴会が、その人への招待の最後のものとなる可能性については全く考えていなかったと思います。

それに欠席したとしても不利益はそれほどのものではないと考えていたと思います。まるで、その人が「主賓」として迎えられる用意があったということも想像していなかったと思います。

主人の怒りは宴会を断ったということだけでなく「その人が主賓」のように迎えられ

るはずの宴会を無駄にしたことへの怒りだったのではないかと思います。主人がその人と、ねんごろに語り合い喜び合う、そういう場としての宴会を日常的なことを理由に破棄されてしまった。破棄してしまった。

招かれた側の見識の甘さ、識別力のなさ、がとても深刻です。

というのも、もはや、ここで断った人たちへの招待は二度と彼らには届かないことが書かれているからです。

招かれた人たちこそが、宴会の主賓であり、宴会の主役だということに気づいていたらどうだったかなあと考えてみてはどうでしょう。

ここに書かれている3人だけでなく、大勢の人たち、すでに招かれていた人たちが似たような対応をしているのだと思います。

それはもしかしたら、今尚そうなのかもしれません。

さらにいえば、人生には、一度しかない出会い、一度しかないチャンスというのがあります。

それでもきっと、明日はくるのでしょうけれど今日とまったく同じ明日は決してこないのです。

2)社会的に招かれざる客が主賓として接待されるという出来事

主人は、しもべに「貧しい人、体の不自由な人、目の見えない人、足の不自由な人をここに連れて来なさい。』

22 やがて、僕が、『御主人様、仰せのとおりにいたしました。が、まだ席があります』と言うと、

23 主人は言った。『通りや小道に出て行き、無理にでも人々を連れて来て、この家をいっぱいにしてくれ。』と命じます。

つまり、その宴会が、もともと予約されている他人たちのためではなく、別の種類の人達が大勢集まる宴会になってしまっています。

あえて、当時の社会に当てはめれば、前者は「ファリサイ派の律法主義者」であり後者は「当時軽蔑の対象であった罪人、病人、異邦人」と考えることができるでしょう。

彼らは、断る理由などありませんから、大喜びで参列し祝福にあずかります。

大喜びでその宴席での楽しみを満喫するわけです。

でも、もともと「自分たちには資格などないはずだ」ということを知っていますから謙遜に感謝だけしているわけです。

しかも、直接は関係ないと思われた人たちさえも招かれていて、招待者の幅の広さは考えられないほどになっています。

祝福にあずかっているわけです。

3) わたしたちに何を語っているのでしょうか

この物語で注意すべきことのひとつは、神様がわたしたちに祝福を与えないと言っているのではなく、わたしたち（招かれているはずの人たち）が「いない」といっているという事実です。

神様が、わたしたちを切り捨てているわけではなく、むしろ、わたしたちの識別能力がとても危うくなっていて、今がどういう時なのか、何をどうすべき時期なのかという判断がとても曖昧になってきているのです。聖霊により、御言葉により、何が大事で受け入れるべきか、何が不要で切り捨てるべきか、しっかり判断できるように祈る必要がありますね。人に決めてもらうのではなく、自分で決断しなければなりません。人生を人のせいにはできないからです。

さらにいえば、この宴会で受け取った祝福は参加した人にしかわからない、ということです。

人は他人のお腹を満たすために食事をすることができません。人のためにおいしい食事を食べてきて、あれこれ説明しても相手のお腹は一杯にはなりません。情報は集まりますが、本当の味、満足感はその食事をした人にしかわかりません。

信仰における祝福も似ています。イエス様からの、神様からの祝福は経験しないとわかりません。情報も祝福の大きな一部ですが、それだけですと、高慢になるだけです。心を満たされ、安息を味わう、感謝の心でいっぱいになる、という出来事はあなたとイエス様との関わりの中で、聖書の言葉を通し、聖霊の助けを受けて、あなたの心にすーっと入ってくるものです。

そのためには「沈黙」が必要です。「御言葉を感じ取る作業」が必要です。

頭で理解しようとするのではなく、むしろ、「感じ取る作業」こそが重要なのです。静まりのなかに、それをしっかり経験できればいいですね。

さらにいえば、人生には「今日」という日にしか出会えない人、今日という日にしか決められないこと、今日という日に決めなければならないことがあるということを知るのは重要です。

そのためにこそ、判断の基準としてのみ言葉の深い理解、そして判断力識別力を養うことがとても大事なことがわかります。

聖書と付き合い、み言葉を思い巡らし、感じとる作業はまさに、そのために必要不可欠なのだと思えます。

祝福がありますように。

MACF 礼拝映像は

<https://youtu.be/e1M9F0Guslc>